

# 鯨文化へのいざない

注：「いざない」とは「誘うこと、勤めること」の意味

会議は水産庁の小松正之参事官が議長を務め、くじら資料館の白石政人館長が長門市における古式捕鯨の歴史と方法などを



午後1時45分から中央公民館で開催された会議には、小・中学生や高校生を含め400人を超す市民が集まりました。  
会議の開催にあたり、松林市長は、5月20日からのIWC総会に向けて「捕鯨を文化の面からとらえ、人と鯨の適切なかわり方を見つめ直し、何よりもきれいな海を守り続けることの重要性を訴え続けていきたい」と挨拶を行いました。

引き続き行われた意見交換では、通中学校3年の安森洋介君とともにパネラーとして壇上に上がった通小学校6年の池永匡君が「自分たちの国の食文化を大切にしたいと思う」と投げかけたところ、ソロモンのネルソン・キレ漁業大臣が「各



フランク・ヘスターさん

紹介。セント・ビンセント政府代表科学顧問のフランク・ヘスターさん、ソロモン政府水産局長のシルベスター・デアケさん、ノルウェー・オスロー大学教授のラース・ワロウさんの3人が、各国における捕鯨の歴史や方法、鯨とのかかわり方などを発表しました。  
セント・ビンセントのフランク・ヘスターさんは長門市について「まち全体に落ち着いた雰囲気があり、美しい海岸線を持つこの様なところに住む皆さんがともうらやましい」と述べ「鯨肉は持続的に利用できる限り、資源として使われるべき」と主張しました。



ジェイ・ヘイスティングさん

会場の参加者からの捕鯨反対についての質問に対して、アメリカのジェイ・ヘイスティングスさんは「多くのアメリカ人は、環境保護運動の広告・宣伝により簡単に影響されてしまう。かつて自分もその一人であったが、以前に訪れた宮城県牡鹿町鮎川港で、鯨と地域の人たちとのかわりを知り、まるで考え方が変わった。長門や鮎川のようなまちへ来てもらえれば、ほとんどのアメリカ人が鯨の食文化を理解してくれるだろう」と話し、会場からはその日一番の大きな拍手と歓声が起きました。



ネルソン・キレさん

国の伝統的な食文化は尊重すべきで、誰もやめさせることはできない」と回答しました。



会場の市民から、鯨墓や鯨回向などの印象について質問が出され、セント・ルシアのラランバリーさんは「鯨墓や鯨回向などを見学し、命を尊重する行為に対して心から感銘しました。今日の思い出は一生忘れたい。自分の国に帰ったら今日の体験を一人でも多くの人に伝えたい」と話していました。